



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第52期生の皆さん、口腔生命福祉学科第15期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様におかれましては、今日の卒業式を無事に迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の予防についてさまざまな対策が取られる中、歯学部教育の総仕上げといえる臨床実習、現場実習を終了し、卒業生の皆さんは私ども新潟大学歯学部が卒業生に求める能力を獲得し、本日、学士の称号を与えられました。この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

我が国は超高齢社会を迎え、2020年には総人口に占める高齢者（65歳以上）の割合は28.7%となり、過去最高となりました。また75歳以上人口（後期高齢者）の割合は14.9%、80歳以上人口も9.2%にも達しています。国連の推計では、2050年までに日本の100歳以上の人口は100万人を突破する見込みです。このような人口構造が変化するとともに社会構造も変化し、医療に求められる社会ニーズも大きく変化しています。

この変化に対応するために、皆さんは社会に出た後も職業人としてのスキルや知識を深化させていくことが求められるでしょう。皆さんが新潟大学歯学部で4ないし6年間で学んだことは、今こ

の時代の医療技術、社会ニーズをベースとした教育プログラムに基づいたものです。この先技術革新、社会構造の変化が進めば、その時代に求められるスキルや知識も当然変わっていきます。「大学卒業＝学びのステージの終了」ではありません。この先も学び、社会人としての成長と進化を続けましょう。変化し続ける社会ニーズを敏感にキャッチし、それに応えられる社会人であり続けましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。

社会に出た後も学び続ける、ということは容易ではありません。努力を続けることは時に辛く苦しく、弱い自分に惑わされて易きに流れたいくなる日もあるかもしれません。そんな日に思い出してほしい一節を送ります。吉田兼好（兼好法師）による徒然草の第150段に「能をつかんとする人」という話があります。原文は省略しますが、この話は「上達のために必要なことはただ1つ、初心者の中から上手な人たちの中に交じり、時に笑われ、恥をかきながら、それでも気にせず努力を続けていくことが必要です。それを出来た者だけがスキルを上達させ、最終的には人に認められるような存在（名人）になっていく。これがどんな道でも変わることのない真理である」というものです（<https://omki.com/news/archives/6811>）。すなわち、一つの道を身につけ、そして極めるには非常に難しいが続けることが大事であり、自身の道を歩むためには自分の弱さに打ち勝たなければならないのです。みなさんが卒業した

新潟大学歯学部は国民の税金により運営されているといっても過言ではありません。タックスペイヤーである国民は卒業生のみなさんに、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。皆さんが社会から認められるために、今日の卒業式の日、これからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。そしてその目標に向かって努力を続けてください。現代の厳しい競争社会で活躍するためにはこの努力が必要です。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、私ども教職員一同はこれからも応援して

いきます。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部はすばらしい教育資源を有し、国内外から高い評価を受けています。私ども教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能、態度を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待してします。





卒業おめでとう

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治 (歯科担当)

歯学科第52期生ならびに口腔生命福祉学科第15期生の皆さん、卒業おめでとうございます。新潟大学歯学部すべての課程を修了され、晴れて学士の学位を授与されました栄誉をここに称えますとともに、これからの希望に満ちた未来に対して心から祝福を申し上げます。また、この日に至るまでの長い年月、卒業生を支えてこられたご家族やご親族の皆様に対し、厚く御礼申し上げますと共に、心よりお祝い申し上げます。

皆さんは、2年以上にわたるコロナ禍の中で、遠隔授業やサークル活動等の制限がなされ、様々な苦勞をし、未だかつてないストレスを受け、大きな戸惑いと困惑があったものと思います。皆さんにとって、まさに学生生活の総仕上げとなる時期に至るまで、この災禍が続いたことは、本当に残念でなりません。様々な経験や体験は、個人や社会を成長させる糧となりますが、今回の災禍の経験により社会がどこに向かうのか、未だに見通すことができません。世界中のすべての人々が、この災禍に対して向き合うことを余儀なくされています。皆さんには、社会に対して期待するだけでなく、新しい社会はどうあるべきか、どこに向かうべきかについてしっかりと考えていただき、積極的に関与していただきたいと思います。

最近、SDGs (Sustainable Development Goals) という言葉をよく耳にするようになりました。「持続可能な開発目標」とも訳されますが、持続可能な社会を目指し、地球の環境を壊さず、未来の世代も美しい地球で平和に豊かに、ずっと

生活をし続けていける社会を作っていこうという取り組みです。人はどうしても自己中心的視点で物事を考えてしまいますが、未来の社会のためには自己の行動や欲望をとときには制限することが求められます。皆さんには、自らをさらに成長させ、未来の社会を担う医療人として高い倫理観を養うとともに、身の回りにある日常と社会で果たす役割というミクロとマクロの世界観の中で、充実した人生を歩んでいただきたいと思います。

日本歯科医学会では、「歯科イノベーションロードマップ2040」を発表しています。これは、我が国の人口が2040年に約1億1000万人となり、現役世代が減少する中で高齢者数がピークを迎え、医療・介護の危機や労働者不足が予想される2040年問題に対し、歯科の革新によって日本を変えることを目指したものです。皆さんも、卒業に当たって2040年問題に対し自分がどう生きるべきか、今一度人生設計について考えてみてください。新たな時代を生き抜き、そして光り輝き続けるためにも、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ね、たとえ回り道であろうと自分が胸を張って歩める道を進んでください。チャレンジする心を忘れずに、勇気をもって困難に立ち向かってこそ、満足できる人生が送れるはずですよ。

新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、皆さんの医療人としての人生をしっかりとサポートいたしますので、気兼ねなく頼ってください。大学から巣立つ皆さんが、様々な分野で活躍されることを心より願っています。

卒業生から

卒業生から

歯学科6年 小林 邑生

毎年1年が過ぎるのが早くなったと感じていましたが、臨床実習も終盤へと近づき、現在は52期生から53期生への引き継ぎの真っ只中です。今回歯学部ニュース「卒業生から」の原稿を執筆する機会をいただきましたので、歯学部の6年間で特に思い出に残っており、また大変だった臨床実習について書かせていただこうと思います。

新潟大学歯学部では実際に患者様の治療をさせていただくことができる、全国でも数少ない診療参加型の臨床実習を行っています。私は12名の患者様を担当させていただいて、先生方にご指導いただきながらそれぞれの患者様に対して、患者様ご本人とも相談させていただきながら最適な治療方針や治療計画を立案して治療を進めていきました。そのなかで歯の被せ物や入れ歯の製作、むし歯や歯周病の治療をさせていただきました。診療を行う前には、事前に教科書や講義資料を読み返

しながらレポートを作成し、先生とディスカッションを行って準備を行います。診療を終えた後は、ポートフォリオの記載や先生にポストチェックを受け診療の反省を行い、次の診療に活かします。担当患者様の治療以外にも、各専門診療科で先生方の治療を見学しその手技を学んだことや、臨床推論の講義で一口腔単位の治療方針・計画を立案しグループ内で討議したことが、自分で考える力を身につけるためになったと感じました。

昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により、さまざまな制限がありましたが、学生の実習に協力して下さる患者様や各診療科の先生方、大学や病院のスタッフの方々のおかげで、こうして臨床実習を最後までやり遂げることができました。

臨床実習をやりきったと感じるとともに、国家試験に対する緊張感もクラスには出てきました。臨床実習と併行して国家試験の勉強をするのはなかなか大変な部分もありましたが、これからは勉強に集中して取り組み、52期全員で合格を目指して頑張ります。



歯学部玄関にて。撮影時のみマスクを外しました

卒業を迎えて

歯学科6年 安野綾夏

このような表題の原稿を書かせていただくにあたり、6年間の印象深い出来事が次々と思い出され、長かったようにもあっという間だったようにも感じられます。

1年次の五十嵐キャンパスでの生活は、初めての1人暮らしで、授業スケジュールの管理などに追われ、あっという間に過ぎて行きましたが、同期や先輩方、先生方とのたくさんの出会いがあった1年間でした。早期臨床実習にて経験した患者役実習では、担当していただいた6年生がここよくて頼もしくて、遠い存在に思えましたが、今自分がその先輩方と同じ立場なのだと思うと不思議な感覚です。

2年次から歯学部での生活が始まり、専門的な講義や実習が始まりました。臨床実習を終えた今、低学年での講義の重要性を痛感しています。先生方の講義を受けることができるのは貴重な機会だったのだということに気が付きましたし、講義を聞いて得たものにより、その後の臨床実習はより充実したものになると思えました。過去の自分には、自分が実際にやることを想像して講義を受けるように、喝を入れたい思いです。

6年間の印象深い出来事の中に、歯学部バスケットボール部での活動も挙げられます。毎年夏に開催されるオールデンタルでは、決勝リーグ進出を目標に部員が一丸となって練習を重ねておりました。普段は楽しい雰囲気、仲が良く、真剣にやるべきときには切り替えができる、素敵な仲間たちに恵まれました。OGやOBの先生方をはじめ、部活動を通して得ることのできた繋がりを、これからの人生でもずっと大切にしていきたいと思えます。

5年生から始まった、ポリクリ、臨床実習はそれまでの4年間で凝縮したように濃く、印象深い1年半となりました。学生の勉強のためになるなら、と3時間の診療に協力して下さる患者さん、新型コロナウイルス感染拡大の中で学生実習継続のために尽力して下さった先生方、指導に当たって下さったライターの方、たくさんの方々のおかげで実習が行えているのだということを感じなかったときはありませんでした。数々の制限がある中、最後まで臨床実習を行わせていただけたことを幸せに思います。1年半を通して学んだことは大変多かったですし、知識だけではなく、精神的にも成長することができたこの実習によって、6年間の締めくくりを果たせたと思います。

最後になりますが、支えて下さった両親、先生方、友人、関わらせていただいたすべての方の存在があったからこそ無事に卒業を迎えることができました。この6年間は人生において必ず糧になると思います。感謝の気持ちを社会への貢献で返せるよう努力していきます。ありがとうございました。



臨床実習を共に乗り越えてきた仲間との写真です
撮影時のみマスクを外しています

卒業にあたり

歯学科6年 岸本奈月

長かった学生生活が、いよいよ終わろうとしています。自分で選んだ道ですが、この歳まで学生をやっているとは想像もしていませんでした。私は本学歯学科には2年次編入で入学しましたが、大学卒業後、大学院博士課程を修了し、教員として大学での学生教育に携わり、再度大学生に戻るという、少々特殊な経歴を持っています。

私と新潟大学との関わりは、大学院に始まりです。漠然と研究がしたいという理由から口腔生命福祉学専攻に入学しましたが、本課程は社会人大学院の制度をとっているため、歯科衛生士として働きながらの学生生活でした。中にいると気付きにくいかもしれませんが、教育にかける情熱や環境、分野を超えた連携のしやすさなどは、新潟大学の大きな特色のひとつであると感じています。社会人と両立するため親身になって相談に乗り、熱心に指導してくださり、そして更には歯学科に編入したいというわがままを嫌な顔もせず聞いてくださった指導教員の先生方には、感謝してもきれません。

一度歯科専門職として働いたことで、編入してからの学生生活はこれまで臨床で行ってきたことの裏付けを改めて理解し、経験と照らし合わせて考えながら能動的に学ぶことのできる貴重な機会でした。講義から知識を得、臨床実習を通して技術を身につけ始めると少し自信につながりますが、いざ卒業して働き始めると、実際にはまだス

タートラインにも立てていなかったのではないかと気付かされます。「あの時一生懸命に授業を聞いておけばよかった」「働きはじめると、聞きたくても聞ける人が身近にいない」このような声はよく耳にしますし、実際に私もそう感じる場面は少なくありませんでした。巷にはさまざまな情報が溢れており、それらを適切に取舍選択する能力は不可欠です。したがって、大学で最先端の研究をしている専門家の生の声を聞き、疑問点を直接質問することのできる今の環境は、とても恵まれているのだと改めて感じています。

学生生活では、SSSVでのインドネシア留学やSCRIP参加など、貴重な体験もさせていただきました。加えて、昨今のCOVID-19の感染拡大の中、先生方のご尽力はもちろんのこと、感染対策をはじめ一人ひとりが自覚を持って行動した結果、一人の感染者も出すことなく、予定されていた臨床実習を完了することができたことは、本学だからこそ成し得たことではないかと感じています。何事にも真面目に取り組み、切磋琢磨し合える52期の仲間たちと一緒に過ごせた5年間は、私にとってかけがえのないものです。

学びに終わりはありません。医療の分野は日進月歩、歯科専門職として患者さん一人ひとりに合わせた適切な医療を提供するためには、日々自身の知識・技術をアップデートしていく必要があります。改めてこのような環境で学ぶ機会を与えてくださった皆さまに深く感謝しつつ、これからの歯科医療に貢献できるよう、精進してまいります。



クラスメートと撮影。撮影時のみマスクを外しました

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 長尾 理紗子

口腔生命福祉学科への入学から4年が経ち、卒業の時期となりました。「口腔は学年が上がるにつれ忙しくなる」と入学当初から耳にしていたが、特に最終学年の1年は臨床実習、特論、就職活動、国試対策などめまぐるしい日々であったように感じます。私が高校生の頃に思い描いていたキャンパスライフとは異なりましたが、この4年間は毎日とても充実していました。

学生生活で印象に残っていることは、やはり病院での臨床実習です。実習では毎日たくさんのことを学び、予習と復習の繰り返しで他に手が回らないほど忙しいこともありましたが、座学で学んできたことと臨床とのギャップに戸惑いつつ、自身の未熟さを痛感しましたが、徐々にできることが増えていき、達成感を感じることができました。お忙しい中、丁寧に指導して下さった先生方や歯科衛生士の皆さんにはとても感謝しております。また、実習で「将来このような歯科衛生士になりたい」と思えるような歯科衛生士さんに出会うことができました。社会に出て学ぶ姿勢を忘れずに、憧れの歯科衛生士さんのようになれるように努力していきたいと思っております。

さらに4年次の福祉実習は特別養護老人ホームで実習させていただく予定でしたが、新型コロナ

ウイルスの影響で中止となり代替課題を行いました。代替課題は先輩方の実習日誌を読んで考察するというもので、施設職員の方や利用者さんから直接学ぶことのできないもどかしさを感じました。しかし、代替課題だったことで社会福祉士が現場でどのような役割を担い、どのように利用者さんに接するべきなのかをじっくりと考える時間を持つことができたと思います。私は福祉分野の法律や制度の変遷の勉強が苦手だったので、1か月間福祉に向き合うこの期間が不安でしたが、振り返ってみると講義だけでは学べないようなことを学べました。

また、私は歯学部サッカー部のマネージャーをしていました。特に2年次のオールデンタルでは1週間近く九州に滞在し、当時は「そろそろ新潟に帰りたいなあ」と思うこともありましたが今では良い思い出です。3年次からは実習の忙しさや新型コロナウイルスの影響もあり、さぼりがちになってしまいましたが、素敵な先輩と後輩に出会うことができ、サッカー部に入部して良かったと思っています。

最後になりますが、4年間お世話になった先生方や病院の歯科衛生士の皆さん、一緒に頑張ってきた口腔生命福祉学科のみんな、歯学部サッカー部の皆さんには本当に感謝しております。この4年間の経験を活かし、福祉の視点を持った歯科衛生士として日々精進してまいります。



教室にて撮影

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 濱元陽香

卒業を前に、この2年間を振り返ったとき、本当にあっという間だったと感じるとともに、学びが多く、非常に充実していた2年間だったと感じています。私は、短期大学卒業後、コロナ禍で世間が大混乱の中、新潟大学口腔生命福祉学科に編入学しました。3年次は慣れない土地で、顔も知らない同級生たちと一緒にオンライン授業を受け、不安や物足りなさを感じることもありました。福祉の専門科目や英語など、今まで苦手としていた勉強に取り組み、新たな発見も多くなりました。また、対面授業が徐々に再開され出すと、優しく楽しいクラスメイトのことをたくさん知り、この学年が大好きになりました。4年生になると、病院での臨床実習が始まり、就職活動や特論の執筆、福祉実習や国家試験の勉強も並行して行う、目まぐるしい日々がスタートしました。短期大学時代も実習は経験していましたが、大学病院での実習は大きく違う点がたくさんありました。各診療科での専門的な治療は、一般の開業医では見られないような困難な症例も多くあり、教科書でしか見たことがなかったような症例も見学することができ、非常に勉強になりました。臨床実習が始まった頃は、自身の知識や技術の至らなさに、落ち込むことも多くあり、苦手な処置から逃げたいと思うこともありました。しかしその度に診療中にも関わらずご指導くださるドクターや、快くご協力くださる患者さん、困ったらいつも助けてくださる衛生士さん、相談に乗ってくださる学科の先生方の存在を心強く感じ、次はここに注意しよう、次はもっと予測しながら動こう、

といったように、苦手な処置に対しても、前向きに考えられるようになりました。また、クラスメイト全員が同じ実習先で実習を行っていることも心強く、分からないことや不安なことの解決には、いつもクラスメイトの協力がありました。就職活動や勉強も頑張りながら、実習に励む友人を見て、何度「私も頑張ろう」と励まされたか分かりません。臨床実習が終了した今、実習初期に比べて、自信を持ってアシストやスケーリングなどの処置を行えるようになったと感じます。まだ知識も技術も不十分で、これからも多くのことを学んで行くこととなりますが、無事に実習を終了し、自身の成長を感じられたのは、周囲の人のお陰だと感じます。この実習期間で関わったすべての人に感謝しています。

この2年間で得た知識や技術、そして何より人との繋がりは、私の人生にとってかけがえのないものになりました。編入学という、一見遠回りのように見える道を選択しましたが、とても価値のある選択だったと思います。卒業後は、新潟大学で学んだことを生かしながら、新たな挑戦をしていきたいと思っています。



実習最終日の記念に撮影